

## 第105回日本精神神経学会総会

## シンポジウム

## 精神障がい者の競技スポーツに参加して——当事者の声——

倉本 拓<sup>1)</sup>, 高谷 義信<sup>2)</sup>

1) 高槻精神障害者スポーツクラブ:WEARE, 2) 大阪精神医学研究所新阿武山病院

2001年、第1回の全国障害者スポーツ大会が宮城県で開催された。その際に、精神障がい者で初めての全国規模の大会としてバレーボール競技が実施された。新阿武山病院では、2002年にデイケアプログラムとして、この大会の近畿予選会に出場したが「負けて悔しい、バレーを続けたい」という当事者の声から、競技スポーツとしての活動を支援することになった。2006年からは当院の通院患者の活動であったものを、精神障がい者でスポーツが好きな人であれば参加が可能な地域型クラブ（高槻精神障害者スポーツクラブ:WEARE）として新たに活動が始まった。地域型にすることによって、複数の医療機関に通院している当事者の方たちが参加し、同時に他機関のスタッフ・学生がボランティアとして活動を支えてくれるようになった。2006年よりフットサルも競技種目としてとりいれられた。2008年6月には、Jリーグガンバ大阪主催による精神障がい者のサッカースクール「Gスカンピオアカデミア」が月2回開催され、同年11月には精神障がい者のフットサル大会「ガンバ大阪スカンピオカップ2008」が開催され、埼玉、愛媛など全国から9チームが集まり熱戦を繰り広げた。スポーツを通じた活動は、徐々に地域への広がりをみせ、これらの取り組みはマスコミにも取り上げられることが多くなった。スポーツを通じた生き生きとした選手たちの姿は、元気や勇気を与え、精神障がい者へのイメージを変えていくのではないかと考える。今回、選手を代表し当事者の方から競技スポーツ

を通じての自らの体験や回復について語っていただいた。

私はこれまで三年間フットサル（5人形式のサッカー競技）というスポーツを通じて、地域の場で活動してきました。この活動は精神障がい者のみなさんを中心とする一種の自助グループで、地域の医療関係者や一般のボランティアの方々と一緒に支えあいながらスポーツをすることによって、当事者たちの活動の場を広げていこうというものです。

私は高校二年生のときに、統合失調症と診断されました。幻聴や幻覚といった症状がひどく、なかなか外出したりすることもできなくて、高校を結局退学してしまいました。毎日、夜中に寝て早朝に目覚めるというなんとも不規則な生活を送っていました。しかし、処方してもらった薬の効果もあって、徐々に外出ができるようになり始めました。少しずつですが高卒認定試験のための勉強も始めました。

そんなときに出会ったのがフットサルでした。私はもともと小さいころからサッカーをやっていたので、主治医の先生から君も参加してみないか、と言われたときは、是非やってみたいと思いました。同じ病気を抱えた友達もあまりいなかったし、ひさしぶりにサッカーボールを蹴ることができるという懐かしさもあって、このフットサルの活動は自分にとってプラスになってもマイナスになることは決してないと確信しました。

最初はやはり周囲に馴染むのはなかなか難しかったのですが、日数を重ねるごとに、みんなとも気さくに喋れるようになりました。これまで他人とうまく喋れなくて、ひきこもりがちだった私にとっては大きな進歩でした。やはり、家で一人で悶々としているより、外に出てスポーツをするほうが病気にもいいと思いますし、何より楽しいと思います。

そして、この点が大切なことだと思うのですが、自分自身の健康管理もフットサルをきっかけにしっかりやるようになりました。夜眠れていない寝ぼけ眼ではボールは蹴れませんし、朝昼晩ご飯を食べないと体力もつきません。ですから、今までできていなかったことができたのは自分にとって大きな収穫だったし、きっとメンバーのみなさんも同じだろうと思います。

去年の11月にはJリーグのガンバ大阪主催のスカンビオカップという、精神障がい者によるフットサルの全国大会が開催されました。スカンビオという言葉はイタリア語で「交流」を意味していて、この大会はまさに全国から集まる当事者同士が交流し、そして地域の人たちとも交流しようという理念の下に開催されたのでした。私たちのチームは残念ながら準優勝という結果になりましたが、それでもスカンビオカップという舞台はたいへん大きな経験になりました。

メンバーや協力してくれるスタッフのみなさんとフットサルをやっていて思うことは、その場には何も分け隔てるものがないということです。ただ、フットサルをやりたいという気持ちで参加しているのであって、そこには障がい者と一般の人という区別はないのです。実際、その場では病気の話はあまりでませんし、もっぱらするのはサッカーの話や日常のささいな笑い話とかです。

そんな私たちの活動が認められたのか、去年には、全国ネットのテレビ番組の取材を受けました。基本的に、顔はモザイクをかけたりしないという方針だったので、自分が出演することに親には反対されました。しかし、番組側の熱心なお誘いと、こんなチャンスはめったにない(?)という気持ちから私はその番組に協力することに決めました。

でも、番組が放映されるまでの約半年間は、自分にとって苦悩の連続でした。今まで私は、自分が障がい者として見られることに何となく違和感を感じていたし、だからといって自分の病気の症状やこれまでの経験を無視するわけにはいきませんが、もちろんテレビに出るということにはそれなりにリスクが伴います。

そのようななかでも、毎月あるフットサルの練習に参加していればどうでもいいことのように思えました。第一、これだけ素晴らしいことを自分たちはしているのだから、これを見て変なことを言う人なんて誰もいないし、何よりフットサルをしていて楽しいのだからそれでいいじゃないか、それが全てだ、と思えるようになりました。一種の開き直りですが、私が生きていくうえでは必要な開き直りでした。

フットサルを続けながら、私は大学受験の勉強もしていました。週に三回大阪の梅田の予備校まで電車で行くのは、それなりにきつく、数年前なら大学受験を受けようとも思わなかったでしょう。そして、今年無事大学に合格することができ、現在は大学に通っています。フットサルをやり始めて、私の生活は明らかに変わりました。

今年も、11月にスカンビオカップは開催されます。それに向けて、メンバーもスタッフも練習に一生懸命取り組んでいます。毎日の努力が報われるように今年こそは大会で優勝したいです。